

福島正夫

『人民公社の研究』

御茶の水書房 1960年11月 398頁

1

人民公社という社会主義国の農業経営制度の歴史において初めての企てが全中国にわたって展開されてからすでに2年半あまりになる。しかしこの制度を構成する諸要素たとえば所有制・分配制などはこの間にかなりの激動を続け、ある面では今日なおかつ流動状態から完全に抜け切っていない。このような状態を反映して、わが国における人民公社の研究の多くは、むしろ流動するその制度の変化を捕捉することに追われ、労作の多数あらわれた割に、学問的に実りある結果に接することが稀であった。このようななかで福島正夫氏があらわされた新著は、制度論の立場からおそらく最初の本格的な研究であり、わが国の人民公社研究、またより広く社会主義農業制度研究のこの面での重要なステップをなすものと確信する。

初めに本書の構成をみておくと、それは本論ともいふべき3章と著者の人民公社視察を記録した1章とから成る。後の1章は本論にたいする補足ないし裏づけ的な性質のものだから、直接には問題にしない。初めの3章は、主題的にも議論としても入り組んでおり、明快に整理し難い点があるが、概括的に問題を区分すれば次のようになるであろう。

第1章(人民公社とコルホーズ) 集団化・公社化の全過程の発展を、農業経営制度全体の枠でとりあげる。

第2章(中国における農民的土地所有の形成とその集団的所有への発展) 土地改革より集団化にいたる過程の制度的発展を土地制度の観点に絞ってとり扱う。

第3章(人民公社の所有制) 人民公社の時期における制度の動きを財産所有制の変化という観点に絞って考察する。

以上各章における中国の問題の検討が、ソ連の対応する経験との詳細な比較によって補われる。

さて本書の何人の目にも明らかな貢献は、第1に中国の農業経営制度の発展が、土地改革、集団化、公社化を挟む各段階およびそれぞれの移行過程の法的政治的特質の克明な整理によってあとづけられたこと、第2に以上

の中国の各段階に対応するソ連の諸段階での法的政治的な制度の特質が、豊かな資料の整理を通じて抜き出され、中国のそれと比較対置されたこと、であろう。具体的な成果についてはここでは説明を省略せざるをえないが、従来同種の試みが多くあらわれて成功的でなく、本著において決定版に近いものができた所以は、1つには福島氏が法律専門家として、1つ1つの政府・党の決議・声明・指示をゆるがせにせず、相互間の継承・断絶の関係を注視してきたことにあるといつてよいであろう。また第2点に関連して、福島氏がソ連について長い研究の基礎をもっていることも指摘されなければならない。中ソ両国にわたりこれほどバランスのとれた知識、経験をもつ学者は珍しいのである。

2

本書の貢献を以上のように列記すると、本書がいかにも平面的な法形式的な研究であるかのような印象を与えかねないが、実際にはその真の苦心は、中国の農業制度が1つの段階から次の段階へ何を動因として移行したか、この移行過程における中国とソ連のちがいが何に起因したか、とくに中国で人民公社という全く新しい制度があらわれたのは何故か、を明らかにするにあったといえよう。このような動因的分析の試みがなされたこともまた、この書の貢献の1つである。ただその試みは、部分的にははっきりした成果をおさめているが、全体としては重要な問題点を残しているといわなければならない。

制度的発展の動因分析のために著者がとりあげる契機は、農民の所有意識であり、また農村の階級関係とそれにたいする労働者権力の指導の形態である。農民の所有意識は、とくに土地制度を支える基礎であり、後者は決して天下りに人民大衆におしつけうるものではない(167頁)。とくに問題の時期の初めには農民一般の強烈な私有意識がある。しかし農業の社会主義的改造は、結局において農民の所有意識の克服の過程である(229頁)。この克服は指導なしには行われぬ(237—8頁)。この指導はいかにして可能か。貧・雇農は私有制を比較的固執せず、改造をうけ容れ易い。富農や旧地主は改造のプレーキとなる。したがって貧・雇農を改造の推進力たらしめることが、指導の具体的方法となる。また著者は必ずしも一元的な説明を与えてないが、階級や権力の問題も、結局同じように社会主義的改造のために不可欠の指導の問題に関係し、その具体的過程を決定する(133頁)。階級関係とはここでは農村における貧・雇農・中農・富農および地主の敵対あるいは同盟の関係をいい、権力関係とは政治権力をもつ労働者階級のこれらにたいする指

導の関係をいう。

所有意識や階級・権力関係の状況とその変化によって中国およびソ連の制度的変化の差を説明する著者の努力は、かなり成功的である。数例をあげるならば、土地改革以後集団化にいたる過程が、ソ連で苦難に満ち、中国で円滑かつ急テンポであったのは、中国で農民意識との関係において農業経営の諸類型とその間の優先順位の決定、移行の段取りを明確に進めたこと、ソ連でそれが行われなかったことにある(この点は中国がソ連の経験を学び取った事例として強調される)。また階級・権力の問題については、ソ連でつねに都市工場労働者が農村に出向いて改革を指導したのにたいして、中国では貧・雇農階級が労働者階級に似た革命性をもち、指導・被指導の関係は大衆路線によっておきかえられたことが強調される(134頁)。人民公社という新制度ができたことも、このような形での「大衆的創挙」として説明される(134, 162頁)。

しかしこの僅かな紹介からもうかがわれるように、著者のとらえた制度的変革の契機はいわば戦術・戦略論の領域におけるものであって、ある制度が何故他の特定の制度に移らねばならぬかを説明する主要要因となりうるものではない。それはただ、そのような主要要因が発動して変革の必要性和方向が与えられたさいに、それをいかに能率的に実現するかタクティックの問題だといっただけでよい。さらにまた特定の段階における特定の制度を捉えらるさいにも、その特質を農民の所有意識や階級・権力関係で説明するだけでは決して充分でない。何故そのような制度が必要とされるかを説明する要因こそは、特定の制度を支える主要な要因である。これらの主要要因はただ生産力発展の本格的検討を過ぎてのみ把握される。議論がやや抽象的に流れたし、また同じような抽象的議論としては著者も生産関係が生産力の発展に照応しなければならぬといった命題を無視しているわけではないから(253頁)、以上の点についてはより具体的な補足を必要とする。

3

第1点は、特定の時期に特定の形態の農業経営制度の採用を求めるものは、全国民経済的な経済計画(中国の場合には社会主義工業化計画)の課題であり、生産関係がそれに照応すべき生産力発展の要請とは、具体的にはそのような経済計画の課題と解すべきだということである。この生産力を狭く農村におけるそれと解すること(253頁)はできない。セクター的な観点からいえば、この生産力とは農業と工業(あるいは非農業計画化セクタ

ー)との関係に関連し、その起動因は社会主義経済の下ではつねに後者の中にある。以上からあらわれる当然の帰結として、たとえば人民公社が純然たる「大衆的創挙」であっては困るであろう。労働者階級の指導は、究極においては経済計画に基いて農業およびその制度を指導するという形で存在しなくてはなるまい。

具体的に生産力と制度とのこのような形を考えると、1955年いらいの急激な集団化の進展は、第1次五年計画の当初の進展を阻害した1953年および1954年末—1955年上半期の食糧供出不足と関係がありそうである。人民公社化の発端は、著者によれば1957年末いらいの水利建設および農村工業の大規模な運動である(78—84頁)。しかし水利建設および農村工業の創設は、農村がきめたものではなく、これを要請する何らかの大きな計画の要請があったにちがいない。これを抜きにして考えると、たとえば農村の小規模工業の建設はそれまでにとられていた都市における集中的投資の方法に比べて理論的には非能率である(たとえばM. Dobbのこの点にかんする最近の考察を参照。An Essay on Economic Growth and Planning, pp. 46—7)。中ソ両国の制度的発展のちがいを、おそらくこのような観点から比較して始めて説得力をもつであろう。この場合両国の計画決定上の決定的な条件の差の1つは、農業における過剰労働力の大小であろう。中国の機械化なき集団化・公社化、ソ連の機械化を伴う集団化はこれと密接な関連をもつ。

第2点は以上の計画の要請が制度の経済的特質を規定することである。制度が生産力発展の要請に照応するということは、具体的には特定の制度が特定の計画の要請を満す特定の経済的装置をもつことである。たとえばコルホーズや高級生産合作社は、計画の要請として商品化率の引き上げを求められている。生産水準が低く、かつその格差が地域的にもコルホーズ間でも著しい段階でこの要請を満す経済的装置として工夫されたのは、コルホーズ毎の集団所有制とそれに論理的に結びつくコルホーズ毎に格差をもつ労働日給与制度であった。もちろんこのような装置は客観的条件を無視しては構築できない。そこでたとえばコルホーズにおいては、屋敷附属地の副業やそれに関連する自由市場という安全装置が追加された。客観的条件はそのほかにも色々あるが、このような経済的条件との関係で計画の要請に答える装置をみることも、中ソのちがいを統一的に解明するためになされねばならない。

紙幅の制約のため以上で書評を打切らざるをえない。福島氏の展開した論点のうち紹介しえなかった点、した

がってまた評者のコメントも省かざるをえなかった点が多々あることをお詫びしたい。そのことが福島氏のすぐれた著作の真価にかんし不当に誤った印象を与えることのないよう祈りつつ擲筆する。 [石川 滋]

二階堂副包

『現代経済学の数学的方法』

岩波書店 1960年10月 337 ページ

本書の冒頭で、著者は次のようにのべている。「本書は、現代経済学において近時さかんになりつつある、近代数学的研究への入門書として……書かれた。」と。だがこの書は、通俗的な意味における入門書ではけっしてない。本書の副題が「位相数学による分析入門」と銘うたれているように、まさに「現代数学において中心的な地位を占める」「位相数学とその応用の解説書」であって、そうとうていどの数学的素養をもつのでないかぎり、およそ入門書というわけにはいかないほどに格調の高いものである。

著者はいささか遠慮しているようであるが、本書を「近代数学的研究」の書というのはあたらない。数学者としてすでに一家をなしている二階堂氏のみからみれば、経済学における数学的研究は、「ヒマラヤの高峰を征服しようとしているのではなく、せいぜい100~300メートル級の丘に登ろうとしている」にすぎないものかもしれない。しかし数学の発展過程が「科学の他の分野から豊かな素材や問題を摂取し、実り多い応用をかえし与えてきている」という有機的な関連を確認している以上、氏はいっこうに遠慮する必要はないのである。本書はまさに「現代数学的研究」の書というにふさわしい。

このような分野にメスをいれて入門風にまとめるということじたいが、おそらくは、至難の部類に属することであろう。本書は、この難関をあるていどまで克服しているように見える。初等的な水準から高度なものへと手ぎわよく組み立てられていく論理の構成、水ももらさぬほどに綿密に追いつめられていく論証の過程、さらに加えて流暢な文体など、たしかに著者の実力のほどを示してあまりがある。本書をひもどくほどの人ならば、だれでも、本書のもつ優美な論理体系にまず一驚するにちがいない。著者じしんの言葉をかりれば、「現代の美的感覚とも大いに通ずる」ところのある数学上の芸術作品とでもいえるだろう。だが逆にまた、その点にまさに本書

のもつ最大の欠陥もあるわけである。

本書があまりにも優美な論理体系にまとまりすぎていること、それがそもそも問題であろう。「論理的条件というものは、その本性上、どんな《もの》についても真か偽かどちらか一方が成立すべきものである。」と著者はいう。数学にとってはたしかにそのとおりである。しかしそれを指摘したからといって数学の基礎はすこしもあきらかになりはしない。ましてや数学利用にさいしては、そのような形式観が逆に禍根となるばあいさえあるだろう。経済現象が無矛盾な体系であるのかどうか、このような問題については、著者はなんらの疑問も感じていないようである。それどころか、経済現象はあたかも完全な調和体系をもつかのようには想定されている。たとえば、「Adam Smith を Gallilei にたとえれば、理論経済学における Newton といわれるべき学者は、Léon Walras であろう。……Walras によって体系化された一般均衡理論(は)、……今日においてもなお、殆んどあらゆる理論的、数学的な経済分析のもっとも重要な基盤となっているのである。」また、「Walras 流の正統的な数理経済学的手法による、国民経済の理論的分析は、つぎのような手続きで行われている。(a)個別的経済主体の経済行動の分析、(b)多数の個別的経済主体の経済行動の間の調和の問題。」などなど。このような主張は本書には随所にみられる。著者の主要なねらいは、この調和の問題、つまり均衡解存在の問題におかれているが、本書では、この均衡解存在問題の視点から、最近の数学的諸理論のほとんどが統一的に体系化されているのである。

まず産業連関論の可解問題(1章)からはじまって、線型計画や活動分析などの最適値問題(4, 6章)へと進み、さらにゲーム理論の鞍点問題(7章)へとしだいにその格調が高められていく。これと平行して、必要な位相数学の解説が行われるのであるが(2, 3, 5章)、これらの諸問題はすべて、「きわめて限定された意味ではあるが、均衡解の存在問題としての性格をもつこと」が強調される。本書の体系では、最近の数学的諸理論はあげて「均衡解の存在問題」(後編, 8, 9, 10章)の前編(「現代静学分析」)であり、序章であるにすぎない。均衡解の存在問題にいたってはじめて、全体系の最後の判定がくだる。現代数学の立場から「一般均衡理論の基礎がためと再構成」を行うこと、これが本書でなされているすべてである。

このような基調をもつ本書にたいして、著者は「現代経済学」という各称を冠しているのであるが、これは